

佐伯史談

第二二二號

「郷土史研究」誌
通算百三十五号

昭和五十三年四月八日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稲垣字龍鏡寺 羽柴芳

提唱

あがふるさとを

もつとよく理解し大事にしたい

佐伯史談会 副会長 羽 柴 弘

ふるさとの尾鈴のやまのかなしさよ 秋も
かすみのたなびきてをり 若山 秋水

四十三歳の長くもない生涯を、酒を愛し、旅をつづけ
た秋水は、昭和三年九月肝硬変でたおれた。

歌人秋水は、その生まれたるふるさと坪谷村（宮崎県東臼
杵郡東御所大字坪谷）の、自然と人情をこよなく愛した。別
つても、その両親によせていた愛情の、切ないまでの流露
が、歌集のおちこちに多く、読む人々の心をとらえては
なさない。旅にあけくれした秋水が、恐らく久々にふる
さとに帰る日、戻るかにそびえている尾鈴山を遠望で、
こみあげてくる情感のままに、「愛しさ」とうたいあげ
たものであらう。

人には誰にもふるさどがある——。この言葉は誰かの歌
謡曲の一節であるが、その通り、誰にも生まれ育つたふ
るさとはある。しかし、広い世間にはそのふるさとを忘
れた、いや、ふるさとを喪失した人々が多くなっている。
そこまできなくて、ふるさとをいとおしむ心は人々
ちまちで、これはそのふるさとでの生活体験や、ふるさ
と理解の意識のちがいに
ともづくもので、何
とも仕方がない。

本号の内容

小さき谷川の流れに
そうて、十戸あちこち
の住居が散在している
山村もふるさとである。
あるいは幼少の日に学
び遊んだ小学校、その
周辺一帯の村落、当時
は「何々村」を称して
いたのが、今では町制
を施き、あるいは隣接
の市に編入されている。
それらふるさとである
世の中が進んで来て
人々の生活領域はグン
と広がるともいって（羽柴弘）
研究 下浦の開港史（野手比一）……三
〇 統一佐伯維治の年譜（吉藤西太）七
〇 第一台殿台殿——（矢田 清）……八
〇 佐伯の屋敷（穴頭）の戦（羽柴弘）九
〇 佐伯 佐伯四郎八十八ヶ所（吉田良一）二
〇 佐伯 佐伯文六十年（佐藤栄陽）……六
〇 佐伯 わがふるさと元田（元田 龍一）五
〇 佐伯 元田部落の共有地（元田 龍一）五
〇 佐伯 佐伯の食の物語（佐藤幸人）……三
〇 佐伯 佐伯の山と林と家と（山本 保）……三
〇 佐伯 二十周年記念行事……五
〇 佐伯史談会三十年の足跡……五
〇 佐伯史談会 佐伯市……五

とひろがっている。だから番匠川・堅田川両流域はもとより、宇目町・上浦から中浦・米水津・蒲江の果々まで、一市・五所・三村の広域圏、そのすべてが私ども共通のふるさととなっている。少なく共佐伯史談会の私どもにとつては、佐伯市・南海郡の全境をもつてわがふるさととし、相携えて広域佐伯の歴史と文化をしらべ、ふるさと愛護の先頭に立つてはならないか。

薄命の詩人石川啄水に

ふるさとのなまじなつかし

停車場の人ごみの中に

そを聞きにゆく

という三行詩（短歌）がある。沙漠のような東京の都会生活に、おえやながら暮らして、身も心も疲れ果てた啄水が、ふるさとの言葉（なまじ）なまじや方言を求めて、停車場の待合室に人ごみをわけて聞きに行つたのである。明治三十年代の東京上野駅のおたりを、望郷の情おさへがたくて、さ迷い歩いていった啄水の姿が、私の胸（むね）をよぎる中にはありありと浮かぶ。

その啄水のふるさととは、東北岩手県の寒村浪民村（今は岩手郡玉山村に属する）で、「石をもて追わるる如く」村から追い出されて、貧苦の中に妻子を養い、一時は北海道に渡って文筆生活が続けた。だが、啄水には浪民村がふるさととして、北上川があり、岩手山があり、その独得の三行書きの名歌として、今も夢を青年子女に愛誦（あいじゆ）されて

かにかくに浪民村は恋しかり
思い出の山

思い出の川

いろいろと、憂き世のくるしみは誰しもあるうが、ふるさとだけはかわりなく、あたかも母親のふところのよう、あたかもかくふくよかなものである。

悠久の昔から、幾十世代前の私どもも遠い先祖たちが住みつき、山や海の狩猟にはげみ、山野を開拓し村づくりに励み、何百年の歴史をかさねたふるさとである。私どもはその先祖たちの血をうけつぎ、父母の愛育の中でこのふるさとで生長し、父祖伝来の田畑や家、そしてそれによる生活を、子孫に受けついでもらおうとしている。ふるさと佐伯の歌人中根貞考の三つれの歌碑には、

ふるさとの移ろふもうしふるさとのかはらぬ

もうしはしきふる里

と刻まれている。このはしきふるさととは、はじめにあげた若山牧水の尾鈴の山のかないふもと、ともに切ないオズ思慕するふるさとへの愛情の表現である。

私はふるさとへの思慕を、いささか文藝的にとり上げたが、ふるさと佐伯を皆さんと共有していることを思いもつと情熱をかたむけたいと考える。幼少の日は母のふところ抱かれて、ただ甘えるだけで別がありがたいとも思わずに生成した。

ふるさともその通り、他郷で暮らすなぐとて、私どもはもつと意欲をもやし、積極的にながふるさとはどうあるか、どんなにすむれているか、その実態の究明に励みたいと思う。これが史談会二十年の今年の私の提唱である。そしてこれは史談会研修の基本である。